なごや文化情報

2022
Spring

No.401
NAGOYA
Cultural
Information

Pick Up Gallery／AIN SOPH DISPATCH
特集／2021　1年をふりかえって
令和3年度 名古屋市芸術賞・名古屋市民芸術祭賞
#zoom up／大ナゴヤツアーズ代表　加藤幹泰さん

公財団法人 名古屋市文化振興事業団

2022
Spring

表紙

霊（れい）

（2021年/H120cm×W120cm/紙、墨）

「靈」には、雨乞いをし降雨を祈る意味に加えて、神霊の降下を三つの器で受け止め吉祥とする意味がある。作品制作時に一心不乱に書き続けていると、急に何かが降りて来て、書けたと思う瞬間が訪れるのである。

冨永（とみなが）　奇昂（きこう）

1964年　愛知県生まれ
1987年　名古屋芸術大学デザイン科卒業
2017年　エビスアートラボ個展（名古屋）
2018年　ヨスインターナショナル展（韓国）
2020年　第37回日本篆刻展　奨励賞

現在、東海書道藝術院副理事長

Contents

Pick Up Gallery　AIN SOPH DISPATCH…… 2
2021　1年をふりかえって…… 3
令和3年度　名古屋市芸術賞…… 8
令和3年度　名古屋市民芸術祭賞…… 9
＃zoom up　大ナゴヤツアーズ代表　加藤幹泰さん…… 10

「なごや文化情報」編集委員
上野　茂（ナゴヤ劇場ジャーナル編集長）
杵屋六春（長唄·唄方 名古屋音楽大学講師）
黒田杏子（ON READING）
鈴木敏春（美術批評·NPO法人愛知アートコレクティブ代表理事）
濵津清仁（指揮者）
吉田明子（人形劇団むすび座 制作部長）

Pick Up Gallery

AIN SOPH DISPATCH アイン ソフ ディスパッチ

令和2年度愛知県芸術文化選奨新人賞受賞記念展
荒木由香里個展「集合」（2021年4月～5月）

2006年10月に名古屋市西区にて開廊。2017年に中村区に移転。優れた作家を発信するプライマリーギャラリーであり続けることを、矜持としています。ギャラリースペースにて年間約8本の企画展示を開催。展覧会を通して若手アーティストの発掘·育成を行いながら、アートフェアへの参加、コミッションワーク、外部展示のディレクションにも努めています。

1996年よりウエストベスギャラリーコヅカにてアシスタントディレクターを務め、名古屋のアートシーンを見てまいりました。その実績とノウハウを生かし、2010年に設立した「名古屋コンテンポラリーアートマップ」の運営メンバーとして、より多くの人に名古屋のアートシーンを知っていただくため、世界に発信していきたいと思っております。

設　立　2006年　　代表　天野智恵子
住　所　〒453-0013　名古屋市中村区亀島1-8-26
電　話　052−433−1619

取り扱い作家　川田英二、平田あすか、荒木由香里
ふるかはひでたか、阿部大介、伊藤正人
尾野訓大、山田純嗣、鈴木淳夫、柄澤健介　ほか
ウェブサイト　http://ainsophdispatch.com

2021 1年をふりかえって

洋 舞 長谷 義隆(WEB「茶美会」編集長)

コロナ禍が広がって2年弱。2021年は公演控えがなお続く中、芸術の存在意義を問い「ウィズコロナ」を見据えて、むしろ表現活動の幅を広げるアーティストたちがいた。

加藤おりは y Company DANZAK スペイン舞踊公演
「SOPLAR ～いのちの風焔～」
11月14日　名古屋市芸術創造センター

スペイン舞踊家加藤おりははその代表的な1人であろう。フラメンコの枠を超えてこの年、舞台、映像作品提供など大小20近くに出演し、精力的に表現活動に取り組んだ。ネットで無料配信した映像作品「ORIHA KATO Wabi-Sabi PROJECT」は、茶道、書道という日本の伝統文化の底にある「型」の美に着目してダンスと融合、斬新な3部作だった。久々の自主公演「SOPLAR ～いのちの風焔～」(11月14日、名古屋市芸術創造センター)では、封印していた演出の才能を解き放って、疫禍によって増幅された恐怖、喪失、断絶の一方で自然の再生をテーマに、シュールでハイセンスな舞台芸術を創造。舞踊家としても超絶技巧のフラメンコを熱く踊って完全燃焼した。

前年、公演活動をほぼ休止した現代舞踊の倉知可英は一転、感染症拡大防止とライブの両立に打って出た。「倉知可英 DANCE YARD5」(8月12日、ちくさ座)で披露した「Ma Sada Yacco ～凛として咲くが如く」は、演出と構成に冴えを見せ、19世紀末の耽美を基調に、明治から昭和を駆け抜け、世紀末のヨーロッパを魅了した女優川上貞奴のもう一つの人生を描きつつ、自身の境涯を投影した。オルガン奏者吉田文の「Veni, Sancte Spiritus ～来たれ、聖霊よ～」(11月3日、愛知県芸術劇場コンサートホール)に客演し、音楽の精神世界をソロダンスでは巧みに視覚化した。

倉知可英 DANCE YARD5
「Ma Sada Yacco～凛として咲くが如く」
8月12日　ちくさ座

ジャズダンスの三代舞踊団は例年通り、年2回の定期公演を敢行。歳末のクリスマス公演では、三代真史はフレディ・マーキュリーの音楽世界を賛美しつつ、スタイリッシュな三代流ダンスを深めた。

前年は定期公演を見送ることが多かったバレエでは、秋以降、古典全幕バレエの上演が相次いだ。越智インターナショナルバレエは越智久美子とワディム・ソロマハの二枚看板の名古屋市芸術奨励賞、愛知県芸術文化選奨文化賞の受賞を記念して、大作「ロミオとジュリエット」を上演(11月13日、愛知県芸術劇場大ホール)。岡田純奈バレエ団はグランドバレエ「眠れる森の美女」(11月21日、同)で、ダンサー育成の実を挙げた。

ウィズコロナの時代に、何かと制約が多い公共ホールより、柔軟に対応できる芸術発表の場を開設する動きが出てきた。コンテンポラリーダンサー小山田魂宮時が20年、東区に空き家を改装した「徳川古民家ギャラリー結」を開設した。21年春には中区の「ぎゃらり壺中天」3階に多目的スペースができた。さらに同9月には、スペイン舞踊家礒村崇史が千種公園近くに小劇場「MI PATIO」(ミ・パティオ=スペイン語で「私の中庭」)を開いた。小回りがきく個性的なフリースペースで、ダンス、美術、音楽、CG、映像配信などジャンルを超えた協働による新たなアート創造の芽が育まれた。

演 劇 小島 祐未子(編集者・ライター)

2021年は様々なタイプの俳優が印象に残った。

10月に公演された「マッピングDEシェイクスピア『The Tempest』」は、シェイクスピア晩年の幻想的な戯曲とプロジェクションマッピングが融合した作品。主人公プロスペローを演じたのは劇座の天野鎮雄だ。80歳を超えている天野には、いわば一世一代だったであろう。それだけに終幕で観客に語り掛ける口上には重みがあった。また妖精エアリエル役のLONTO、怪物キャリバン役のChangも特筆に値する。道化師としてラストラーダカンパニーを結成している二人は、普段はノンバーバル(非言語)の作品を手掛けており、初めて舞台で言葉を発

マッピングDEシェイクスピア「The Tempest」
10月22日～24日　名古屋市青少年文化センター

振り袖講談「怪人二十面相伝」　4月7日　ナビロフト

したとのこと。しかし声も身体の一部としてコントロールできているからか、セリフ回しが良く、人間ではない役柄と二人の雰囲気もマッチして存在感を示した。このキャスティング含め、演出の齋藤敏明も手腕を発揮。プロジェクションマッピングが話題ではあったが、むしろ人間の力を再確認できた。

日本演劇史に名を刻む劇作家、北村想が昨年は俳優としての顔も存分に見せた。avecビーズとの共同企画による連続公演『戯曲・アリス人形館』で北村は喫茶店の元店主に扮し、「春の夜」では二宮信也（星の女子さん／スクイジーズ）を相手に、「秋の夜」では荘加真美（劇団ジャブジャブサーキット）を相手に怪演。台本ともアドリブともつかない掛け合いで観客を揺さぶる。そのうち、なにやら二宮や荘加と一緒に北村流落語でも聴いているような気分にもなり、まさに虚実皮膜の舞台であった。

3月には劇団B級遊撃隊の佃典彦が指導・演出する劇団、座★NAGAKUTE「アトムへの伝言」（作・横内謙介）を観た。この公演はコロナ禍で1年の延期を経て実現。劇団員は2年に渡って創作に取り組み、これが功を奏した。中でも伝説の漫才師・海老乃家ラッパを演じたすがとも、お笑いロボットのカッパを演じたのりづきみなが好演。活動休止も経験した後、稽古再開を果たした彼女たちは、一度入っていた役を立ち上げ直すと、より深く掘り下げることができた。さらに佃の演出も細かくなり要望も増えたそうだが、それにも応えた。『稽古は裏切らない』と言うが、実感させられる出来栄えだった。

関西演劇人との交流にも触れておきたい。4月に兵庫県の俳優、船戸香里が北村想の「怪人二十面相伝」を振り袖講談として上演した。船戸は講談師・振り袖かを里という設定で、二重構造の一人芝居になっているのが面白い。プロデューサーは北村自身、演出は北村の門弟である高橋恵。この公演はナビロフトの閉館発表を受けて急遽決定。翌5月、同劇場は27年の歴史に幕を下ろした。ナビロフトはかつて北村が率いたプロジェクト・ナビの拠点であり、船戸と高橋は最後に花を添えようと駆けつけたわけだ。長く親しまれた劇場が無くなることは、人が亡くなるのと同じぐらい重い。ナビロフトが名古屋の文化に多大な功績を残したことは決して忘れない。

洋　楽　早川 立大（音楽ジャーナリスト）

コロナ禍の影響をクラシック業界も大なり小なり被ったことはほかの文化活動と同様であり、困難の中で演奏会を実現させた演奏家・団体をはじめ関係者たちの血のにじむような努力には敬意を表するほかはない。

［声楽］感染拡大防止対策がとりわけ難しい声楽のコンサートは数が少なかったことは否めない。その中で、名古屋二期会が定期オペラ公演をモーツァルトの傑作『魔笛』で再開した（日本特殊陶業市民会館フォレストホール、10月23、24日）。創立50周年記念として総力を挙げた上演は秀逸。歌唱は原語のドイツ語、台詞は日本語だったが、ジングシュピール※だけに軽快な筋の展開が分かり易かった。名古屋二期会はまた宗次ホールと協力して「歌ざんまい」シリーズを開始し、山口雅子（6月28日）、渡部純子（7月26日）らが得意の持ち歌を披露した。愛知祝祭管弦楽団による「ワーグナー・ガラスペシャル」は『トリスタンとイゾルデ』『ローエングリン』などからの名場面集。三澤洋史の指揮、三輪陽子や初鹿野剛らの立派な歌唱を得て、アマチュア楽団公演とは思えない成果を挙げた（8月15日、愛知県芸術劇場コンサートホール）。

愛知祝祭管弦楽団「ワーグナー・ガラスペシャル」
8月15日　愛知県芸術劇場 コンサートホール　撮影者:KANON

［器楽］オーケストラでは名古屋フィルハーモニー交響楽団（名フィル）、セントラル愛知交響楽団、愛知室内オーケストラ（ACO）が定期演奏会中心にそれぞれ持ち味を発揮した。予定されていた海外からの出演者が来日できないケースが多々あり、代役探しなどの苦労は大変だったろう。そんな中で、ACOが「ソリスト川本嘉子」「スーパーペダリスト」などといった意欲的な新シリーズを始め、その旺盛な活動から目が離せない。

室内楽では、ピアニスト桑野郁子を中心とする室内楽集団レーベインムジークによるフォーレ室内楽全曲演奏会全5回のうち今年は第2回から4回まで（2月21日、6月6日、10月3日、電気文化会館 ザ・コンサートホール）。毎回、知情意のバランスの取れた佳演だった。令和3年度名古屋市芸術奨励賞を受賞したオルガニスト吉田文がソプラノ加藤佳代子、現代舞踊の倉知可英とコラボした「Veni,Sancte Spiritus ～来たれ、聖霊よ～」はコロナ禍を超えて、未来へ訴えかけた（11月3日、愛知県芸術劇場コンサートホール）。

ピアノに優れたリサイタルが多かった。田村響は『展覧会の絵』などにスケールの大きい名演（5月3日、宗次ホール）。北村朋幹はドビュッシーなどを瑞々しい感覚で表現した（8月21日、同）。北村はまた名フィル第486回定期公演にも独奏者として登場し、地元ファンに著しい進境ぶりをアピールした（1月22、23日、愛知県芸術劇場コンサートホール）。一方、石川馨栄子はベートーヴェンのピアノ・ソナタ連続演奏会を大曲『ハンマークラヴィーア』で締め括り、これまでの活動のひとまずの集大成とした（9月25日、電気文化会館 ザ・コンサートホール）。最後にリスト・プログラムの中川朋子を挙げたい（12月22日、同）。巡礼の年第1年『スイス』と超難曲ロ短調

ソナタを豪快真摯に弾き切って、厳しい鍛錬の成果を示した。

※シングシュピール…セリフが入るオペラ

中川朋子ピアノリサイタル
12月22日　電気文化会館 ザ・コンサートホール

能　楽　飯塚 恵理人（椙山女学園大学 教授）

今年は新型コロナウイルス感染拡大防止対策の影響により席数の制約はあったものの、公演数は増えてきた。ここでは名古屋能楽堂での催しを取り上げた。

「名古屋能楽堂正月特別公演」（1月3日）、久田勘鷗の《翁》は声量豊かで威厳があり、天下泰平を祈る司祭であった。千歳の吉沢旭は颯爽とした舞に加えて、謡のうまさに定評ある師匠の故泉嘉夫譲りの規矩正しい謡がよかった。面箱持の井上蒼大と共に大成を期待する。

「名古屋宝生会65周年記念会」（1月24日）。内藤飛能の《杜若》は明瞭で抑えた中に華やぎがある謡が高位の女性の転生した杜若の精らしかった。河村総一郎がリードする囃子が序之舞を盛り上げ、いずれもの修練が十分に伺われた。

名古屋宝生会65周年記念会　能「杜若」　1月24日　名古屋能楽堂　撮影:工房円

観世喜正・河村眞之介・後藤嘉津幸・竹市学の四人会「能の旅人」（6月5日）は竹市の師である故藤田六郎兵衛を偲ぶということで《清経　恋之音取》だった。竹市の「恋之音取」の笛は、シテ観世喜正の足運びとよく合い、清経の身体を包んで一の松へ導くようであった。また入水の前に横笛を吹く型でのアシライはすっきりとして清経の覚悟を感じさせた。舞台上のいずれもが稽古での研鑽の成果を発揮し、藤田師も泉下で喜んでおられると思う。

衣斐愛主催の第六回「逢の会」（8月1日）は、衣斐愛と父の衣斐正宜が両シテの《乱　和合》。名古屋宝生会を長年支えてきた正宜師の喜寿を祝っての選曲で、足遣いなど息がぴったりあった美しい相舞であった。

名古屋能楽堂九月定例公演　能「鱗形」
9月5日　名古屋能楽堂　撮影:工房円

「名古屋能楽堂九月定例公演」（9月5日）での狂言共同社の《雷》。アド薬師の佐藤友彦は雷との力関係の変化を自然で無邪気に演じた。シテ雷の鹿島俊裕との息も合い、佐藤から共同社の中堅への芸の伝承を感じた。長田郷の《鱗形》も師匠である長田驍の芸を継承して、切れのよい身体の動きや口跡よい謡という華やかさの中に位を守る堅実と基本への忠実があった。

「第42回名古屋金春会」（11月7日）は本田光洋の《夕顔》。しなやかで美しい謡は儚く、舞も花の精にふさわしく典雅であった。名古屋支部に移籍した本田布由樹の地謡もよく、名古屋の金春流の今後も期待できる。

若手観世流シテ方の研鑽会である「青陽会研究能」（11月14日）では伊藤裕貴の《箙》。しっかりした謡と切れ良いカケリが颯爽とした若武者ぶりであった。伊藤は惜しくも12月18日に逝去された故前野郁子の名大観世会以来の弟子であり、今後の活躍を前野師も天から見守っておられると思う。

文化庁事業採択公演である「日本全国能楽キャラバン」の一つ、「名古屋宝生会特別公演」（11月21日）では喜寿を迎えた衣斐正宜の《鷺》が、白一色の装束で厳かで清澄な雰囲気の中に華やかさのある舞であった。和久荘太郎の《道成寺》は、前シテに寂寥感があり娘の執心を上品に表現していた。

その他管見出来なかった舞台も多く、来年も一層期待する。

邦楽・邦舞　北島 徹也（CBCテレビ 論説委員）

リアルでの発表を前提とした邦楽・邦舞は、『小唄大会』（2月28日）が中止となるなど2021年も新型コロナの影響を受けざるを得なかったが、緊急事態措置の期間の合間を縫って公演が開催された。

噺矢は稲垣流『第七十回記念 豊美会』（3月25日、御園座）。稲垣舞比が家元を継承した披露「春興鏡獅子」は前半のしとやか、後半の豪快と踊り分けた。

13回『梅奈香会』（4月4日、名古屋市青少年文化センター（以下「アートピア」））で花柳梅奈香は「粟餅」「おせん」「雷船頭」と大奮闘。西川真乃女は『第15回 しのじょ会華真』（4月24日、御園座）で平家物語に取材した新作「佛原」を発表、西川章之人は第1回『西川流 章之人の会』（4月29日、アートピア）で細かに行き届いた「連獅子」を将之人と見せた。

『第百六回 工藤会』（4月29日、愛知県芸術劇場大ホール）は工藤倉鍵が「累」で色悪振り、扇弥は「傀儡師」で変わら

ぬ闊達さを見せたが、前家元 扇寿が逝去された。ご冥福をお祈りしたい。

赤堀加鶴繪は幻想に満ちた創作「夢の戯(たわむれ)」を『第三十回 赤堀加鶴繪舞踊会』(5月4日、日本特殊陶業市民会館ビレッジホール(以下「市民会館ビレッジ」)で発表、品格の「鶴の寿」も佳品。

『珠園会』(5月23日、御園座)では、五條園美が抑えた表現の「山姥」、珠實が間の良い「独楽」を見せ、園小美は「狐火の段」、美佳園と麗は「連獅子」と、活躍する門下が「二人道成寺」で一堂に並んだ。園美が主宰、昨年末の話題の創作舞踊劇「名古屋城天守物語」の舞踊を抜き出した公演も催された(12月26日、名古屋能楽堂稽古室)。

西川鯉之亟・鯉娘の『第13回 ふたり華』(5月28日、市民会館ビレッジ)は「吉三しぐれ」を延寿太夫の地方で可憐に表現。西川菊次郎も「山めぐり」に風格を見せた。

稲垣流『第七十回記念 豊美会』
3月25日　御園座

『第三十回 赤堀加鶴繪舞踊会』
5月4日　市民会館ビレッジ

花柳磐優が主宰し、名古屋市文化振興事業団と愛知芸術文化協会の連携事業として、古代の物語にモチーフを得た創作舞踊劇「夢SAKURA」(8月6日、7日、中村文化小劇場)は、映像とコラボして美しく舞った。

花柳朱実は試演会『ちょっと能楽堂で』(8月28日、名古屋能楽堂稽古室)、『第23回 朱ざくら会』(11月23日、名古屋能楽堂)を開催。「葵上」で地方を工夫、真乃女と踊った「伊勢参宮」は緩急を利かせた楽しい舞台となった。

藤間勘楊30回『秋の舞踊会』(10月2日、名古屋能楽堂)は勘楊「新曲浦島」が海の広がりを感じさせ、「屋敷娘」の勘之介は流麗だった。

『第73回 名古屋をどり』(10月29日～31日、御園座)は西川右近追善公演として、映像も併せた構成の「西川右近の一生」、男性幹部による「五人連獅子」、女性幹部の「六玉川」など。昼の部は門下の古典舞踊の数々だったが“追善舞踊会”として敢えて『名古屋をどり』から外したのはなぜか。

素踊り「外記猿」で西川京志郎が実力を見せた『第26回菊水会』(11月27日、御園座)で、菊次郎は「隅田川」をじっくりと踊った。允喜幸は芝居っ気のある「雪之亟小袖」。

『内田流舞踊会』(10月23日、市民会館ビレッジ)で、家元 有美は「雪の舞」、宗家 寿子は「長短」を披露。

西川ももよの久しぶりの舞台『第2回 ももの標』(12月26日、北文化小劇場)で忠臣蔵をモチーフに様々な役を一人で踊り抜いた「命花淵」は鮮やかであった。

邦楽で注目されるのは杵屋勝千華。コラボレーションの『元禄花見踊』(5月22日、昭和文化小劇場)、長唄『桃華の会』(5月23日、同)、そしてリサイタル『桃華の宴』(5月30日、天白文化小劇場)と大活躍。『第55回 見音代会』(10月3日、中電ホール)、『第28回 杵三会』(10月3日、今池ガスホール)、『第27回 長唄おやこ会』(11月13日、同)と例年の会も揃った。

美　術　田中 由紀子(美術批評／ライター)

2020年に続き、コロナ禍での文化芸術のあり方が問われた2021年。来場者への感染拡大防止対策は必至となり、講演会をオンライン配信したり、ワークショップなど対面型の企画は控えられたものの、愛知県にまん延防止等重点措置や緊急事態措置がとられた4月中旬から5月末、8月から9月中旬にかけても臨時休館等にはせず、三密の防止などに苦心しつつ、年間を通じて展示が続けられた。

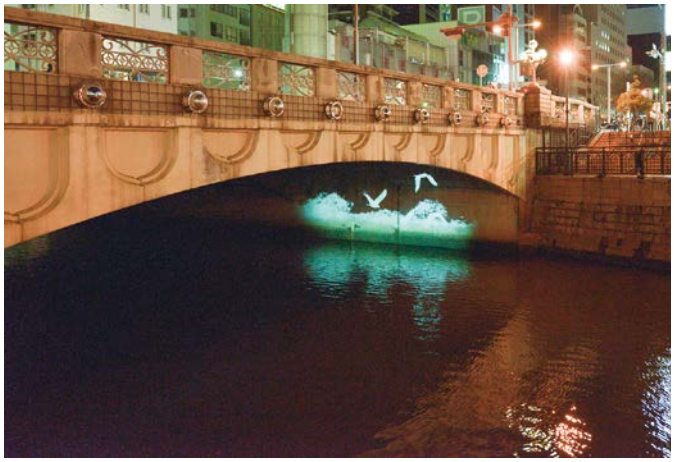
美術館では、愛知県美術館「GENKYO横尾忠則 原郷から幻境へ、そして現況は?」(1月15日～4月11日)が、展示を常設展エリアにまで拡張した1200点以上に上る作品で、横尾の制作活動の全貌に迫った。なかでもTwitterで展開する「WITH CORONA」のマスク作品は、私たちと同時代を生きる一人の人間としての姿を感じさせた。碧南市藤井達吉現代美術館「いのちの移ろい展」(4月29日～6月20日)は、渡辺英司をはじめとする10名の現代美術作家による作品を、収蔵品と併せて展示。個々の作品に目新しさはなかったものの、太古から現代までの個を超えた生命のつながりを感じさせる、コロナ時代を反映した企画といえよう。

また文化フォーラム春日井・ギャラリーでは、滋賀県甲賀市の障害者福祉施設やまなみ工房の38名の作品を「THIS IS YAMANAMI! 毎日をつくる、やまなみ工房の人々」(11月27日～12月19日)で紹介。やまなみ工房の作品は、アール・ブリュット作品として国内外で高く評価されている。緻密さとおおらかさ、力強さと儚さ、ミクロとマクロが共存するそれら

文化フォーラム春日井・ギャラリー
「THIS IS YAMANAMI! 毎日をつくる、やまなみ工房の人々」展示風景

に共通するのは、生きる喜びにあふれている点だ。そんな作品から活力を得た人も少なくあるまい。

アートイベントでは「ストリーミング・ヘリテージ」（spring 3月12日〜28日、autumn 11月12日〜28日）が、2021年から始動した。これは、名古屋港と名古屋城を結ぶ堀川の流れを、文化遺産をつなぐ「stream」と捉え、この地域の歴史や文化の特性を顕在化させようとする試みで、名古屋城エリア、宮の渡しエリア、納屋橋エリアを会場に作品展示、パフォーマンス、トークイベントが行われた。筆者はspringのみ見ることができたが、堀川の水面にプロジェクターを浮かべて錦橋の橋脚に投影されたさわひらきの映像作品《Flying along a dry river bed（installation）》が、水面の揺らぎにより映り方が終始変化し続けるさまが斬新だった。



さわひらき《Flying along a dry river bed（installation）》2021
撮影:Yamada Ko

ギャラリーの展覧会では、スタンディングパイン「杉山健司・浅田泰子 うちの犬の言うことには」（2月6日〜14日）が、共通のテーマで制作した各々の作品を空間に配することにより、犬の視点から見た世界へ私たちを誘った。アインソフディスパッチ「山田純嗣『絵画をめぐって 花と花瓶』」（10月2日〜23日）では、ボッティチェリ《春》に着想した《（21-5）PRIMAVERA》とその制作過程に生み出された模型のインスタレーションに目を奪われた。

近年ではSNSを媒体にした小説や漫画の発表は珍しくないが、愛知県文化芸術活動緊急支援金事業／アーティスト等緊急支援事業 オンライン・アートプロジェクト「AICHI⇄ONLINE」（2月1日〜3月21日、アーカイブ公開5月1日〜2022年3月31日）が立ち上げられ、映画、現代美術、文学、漫画、音楽の分野の作家や制作を支える人々が、新作をオンラインで発表したのは、コロナ禍らしい取り組みといえよう。

文 学　清水 良典（文芸評論家・愛知淑徳大学教授）

文学には社会的な問題をタブーや圧力を恐れず提起したり発掘したりする役割もある。その果敢な社会への発言の成果をふたつ挙げたい。

吉川トリコがWeb版「考える人」に連載していたエッセイ『おんなのじかん』（新潮社）が刊行された。女性にまつわる諸々のタブーを痛快で潔い本音で語ったエッセイ集だが、そのなかの「流産あるあるすごく言いたい」が、ネット上のジャーナリストの作品を対象とした第1回PEPジャーナリズム大賞で、オピニオン部門を受賞した。意外にも「ジャーナリスト」として「時勢に流されず確固たる視点で冷静・鋭い視点を提供した論考・論説、コラム」の対象に選ばれたことが、今後の吉川にさらに広い視野と鋭さを与えることだろう。一方で吉川の新しい長編『余命一年、男をかう』（講談社）は、余命宣告された若い女性が病院で出会った一見チャラい男と同居しはじめる物語である。読者の予想をどんどん良い意味で裏切っていく巧みな展開と心地よいテンポが楽しめた。『おんなのじかん』でも発揮された肩の力が抜けた語り巧者ぶりがよく表れた小説である。

吉川トリコ『おんなのじかん』（新潮社）

次に「追伸」という雑誌の話。硬派の評論やエッセイが小説と並ぶ異色の同人雑誌だが、その10号に掲載された「失われた命のために行動するということ」は圧巻の迫力と説得力だった。名古屋の入管で体調悪化したのに治療を受けられず死亡したスリランカ人女性の事件を刑事告発した平田雅己の講演録である。彼女の死は、アウシュヴィッツ収容所でのユダヤ人虐殺と通底した「政治的殺戮」だと平田は述べる。さらに「追伸」の版元である風媒社は、収容所内でスリランカ人女性が書いた手紙を収めた『ウィシュマさんを知っていますか?』を刊行した。事件が起きた名古屋で、この問題に真っ向から立ち向かうメディアと書き手があることを誇りに思う。

他にも木曽ひかるの『曠野の花』（新日本出版社）は、生活保護ケースワーカーである著者の経験をもとに、格差社会の負の側面として深刻化する貧困問題の事例を描いた小説作品集である。

雑誌の小説では、鈴木友範の活躍が目立った。まず「季刊作家」97号の「緋色の真珠」は、小島信夫文学賞の岐阜県知事賞を受賞した「コボリ」の続編である。スマトラ沖地震で発生した津波に襲われたタイの観光地プーケットを舞台にした物語で、死者への悼みと復興への思いが東日本大震災の記憶とつながる。さらに同誌98号の「E=MC²」は、コロナ禍のリモート勤務のなかで正常さを失う男を描いていて、衰えぬ旺盛な意欲を感じる。

また北原深雪の「十年浪漫」（「じゅん文学」106号）は、急逝した母と長野のブドウとの結びつきの謎が、東日本大震災を機縁としたロマンスの発掘につながる物語である。Google earthのストリート・ビューが鮮やかに用いられていた。

眞野明美『ウィシュマさんを知っていますか?
名古屋入管収容場から届いた手紙』（風媒社）

令和3年度 名古屋市芸術賞

令和3年度名古屋市芸術賞は、次の方が受賞されました。「芸術特賞」は、長年にわたり優れた芸術創造活動を行い、かつ、近年における活動が顕著で、名古屋市の芸術文化の振興に大きな功績のあった方に、「芸術奨励賞」は、継続的に活発な芸術創造活動を行い、かつ、将来の活躍が期待され、今後とも名古屋市の芸術文化の振興に寄与することを期待できる方に贈られるものです。

芸術特賞

吉岡 弘昭（よしおか ひろあき） 【美術】

昭和36年に愛知県立瑞陵高等学校普通科（定時制）を卒業し、画家になることを決意。油彩画にて昭和38年から4年連続で二科展に、また昭和41年には毎日現代日本美術展に入選。昭和42年に東京のスルガ台画廊にて油彩画の個展を開くなど、作家生活を開始。昭和44年には銅板に直接描画するドライポイント技法による銅版画の制作を始める。その後現在に至るまで、銅版画と油彩アクリルによるペインティングの制作を往還しながら、それぞれの個展を交互に開催している。

吉岡氏の作品は現代社会やそこに生きる人間を独自の視点で表現しており、ユーモアやペーソスあふれる世界観が特徴である。数多くの作品が愛知県美術館やエジプト現代美術館など国内外の美術館に収蔵されている。また、「リュヴリアナ国際版画ビエンナーレ展」（平成元年）等に招待出品するなど、国際的にも高く評価されている。令和3年には「吉岡弘昭展『不思議なヒトとイキモノ達』」を開催しており、今なお旺盛な制作活動を続けている。

また、愛知県内にある6つの幼稚園・保育園・小学校で建物外壁にモザイクタイル等による大きな壁画を制作するなど地域社会にも貢献している。さらに、金沢美術工芸大学、名古屋芸術大学などで教鞭をとり、後進の育成にも尽力してきた。

こうした長年にわたる芸術創造活動と後進の育成は当地域の文化芸術の振興に大きな役割を果たしており、その功績は多大である。

芸術奨励賞

吉田 文（よしだ あや） 【音楽（パイプオルガン）】

中学校を卒業後、単身渡独。パイプオルガンの研鑽に励み、平成6年にはA級教会音楽家のドイツ国家資格を取得するなど19年間にわたり海外で教会音楽家・コンサートオルガニストとして活動を行う。国内においては、平成4年に愛知県芸術劇場コンサートホールのオルガンデモンストレーションに協力。以降、全国各地でコンサートを開催している。名古屋での活動としては、カトリック五反城教会を拠点に当地域のパイプオルガン文化を築いた「名古屋オルガン友の会」の精神を受け継ぎ、「名古屋オルガンの秋実行委員会」を平成19年に設立。市民の方々に向けた入場無料のコンサートを定期的に企画している。さらに平成23年以降は、愛知県芸術劇場コンサートホールにて、平日の午前中に親しみやすい作品を廉価で提供する「パイプオルガンブランチコンサート」を企画・開催し、パイプオルガン愛好者の拡大に努めている。

こうした多彩な演奏活動を可能にする技巧的・芸術的な演奏と巧みなプログラム構成は専門誌、新聞等で高い評価を得ている。また、共演者・伴奏者としても活発に活動を行い、多々のオーケストラ、合唱団、ソリスト等のパートナーとして定評を得るほか、現代舞踊など異分野とのコラボレーションや様々な芸術分野を包括する総合的舞台芸術の創作にも意欲的である。今までに培った知識と経験を活かし、祈りの楽器であるパイプオルガンを通じて、人々の心を豊かにするような音楽を伝えることを目指しており、今後もさらなる活躍が期待される。

蟹江 尾八（かにえ びはち） 【伝統芸能（民謡）】

全国の民謡に精通しており、その中でも特に座敷民謡と端唄を得意としている。昭和48年、民謡と端唄（唄及び三味線）を篠田紫栄氏に師事し、昭和62年に「名古屋甚句」で「全日本民謡民舞連盟全国大会」優勝、平成2年には「岡崎五万石」で「輝け!日本民謡大賞愛知県大会」優勝を飾る。

平成4年以降は毎年「民謡と端唄　蟹江尾八会」の公演を行い、令和3年度の公演にて30回を数える。また、弾き語りライブコンサートを各所で開催するほか地元の盆踊り曲や新作端唄の作詞作曲を手掛けるなど意欲的に活動を行っている。

こうした活動の一方で平成9年より千藤幸蔵氏の下で邦楽学理を修得し、名古屋市及びその近郊地域における埋もれた民謡の発掘採譜の研究に取り組む。平成28年には、こうした研究の成果として、発掘採譜した民謡に三味線伴奏の手付けをし、解説を加えた『愛知県民謡集　第一巻　―三味線譜と解説―』を発刊。本書は、民謡の数が少ないと言われてきた当地域に、消え去ろうとしていた文化を蘇らせ、民謡文化の発展の一翼を担うことを願って制作されたものであり、現在は第二巻の制作に取り組んでいる。第二巻は近々の発刊が予定されており、今後も演奏活動と研究活動の両方において、さらなる活躍が期待される。

中部短歌会（ちゅうぶ たんかかい） 【文芸（短歌）】

大正12年に前身となる「名古屋短歌会」の名称で歌誌『短歌』を創刊。昭和16年に名称を現在の「中部短歌会」に改める。歌誌『短歌』は戦時中に一時発行を中断した時期があったものの、創刊から現在に至るまでほぼ毎月刊行しており、平成29年には通巻1,100号に到達した。

昭和30年以降は春日井濵氏が、昭和54年以降は春日井濵氏の逝去に伴い春日井建氏が主幹を務めた。春日井濵氏と建氏の両氏の活躍のほか、稲葉京子氏など全国から多くの才能を発掘したことにより、両氏が主幹を務めた時代に歌誌『短歌』は全国的な知名度を得た。平成16年に春日井建氏が逝去されたことに伴い、以降現在に至るまで、大塚寅彦氏が代表を務めている。

中部短歌会は中部圏を中心としつつ各地に支部があり、毎月の本部歌会のほか各支部でも歌会が行われている。また、各地域の文化的イベントへの参加も積極的に行っており、こうした活動を通して多くの人々に短歌に親しむ機会を提供している。さらに、年に一度全国大会を開催し、外部の著名歌人などをゲストに迎えトークや講演等を行うことで外部の空気を取り入れ、充実した活動を展開している。現在は約450名の会員が活動を行っており、古参の会員を始め、地域文化としての短歌を支えるなど、短歌界の発展に寄与してきた。

令和4年には創立100周年を迎えるため、記念号の刊行や記念全国大会の開催、10年ごとに刊行している合同歌集の制作やその他記念事業が企画されており、今後もさらなる活躍が期待される。

名古屋市民芸術祭2021　名古屋市民芸術祭賞

名古屋市民芸術祭は総合的な芸術の祭典として、毎年10月、11月に開催しています。このうち参加公演において、特に優秀な公演に「名古屋市民芸術祭賞」を、また、特に表彰に値する公演に対して「名古屋市民芸術祭特別賞」を贈ります。

今年度につきましては、「名古屋市民芸術祭賞」は該当がありませんでしたが、参加公演19公演（音楽9、演劇4、舞踊2、伝統芸能4）の中から、次の5公演に「名古屋市民芸術祭特別賞」を授与しました。

名古屋市民芸術祭特別賞（5公演）

【音楽部門】（奨励賞）

戸谷誠子ピアノ・リサイタル

●10月8日（金）　●電気文化会館　ザ・コンサートホール

幅広い時代から王道をいく大曲や、誰もが耳にしたことがある親しみ深い小作品などを多彩に選曲し、力強さと抒情的なタッチのいずれも堪能できる構成で、見事に聴衆を引き込んだ。躍動感溢れるフレッシュな演奏は、意欲的に続ける真摯な演奏活動に裏打ちされており、今後の飛躍が大いに期待できる。

【音楽部門】（オリジナルアンサンブル賞）

VIOLASSIMO! vol.6

●11月15日（月）　●電気文化会館　ザ・コンサートホール

一見地味にもみえるヴィオラだけの珍しいアンサンブルで、大曲からオペラアリアまで幅広く選曲し、オリジナリティ溢れるアレンジを施して、聴きごたえのある格調高いコンサートに仕上げた。技量の確かな奏者同士が互いに信頼し合い、息の合った演奏を繰り広げることで、最後まで聴衆を楽しませた。

【演劇部門】（奨励賞）

劇団うりんこ「わたしとわたし、ぼくとぼく」

●11月20日（土）<2回公演>　●うりんこ劇場

しっかりとしたトレーニングに裏付けられた揺るぎない実力により、観客を魅了する舞台を創り上げた。LGBTsという今日的かつセンシティブな題材を採り上げながら、子どもも楽しめる作品に仕上げ、確かなメッセージを届けることに成功した。積極的な若手俳優の起用も奏功し、観客・創り手ともに将来性を感じさせる舞台だった。

【舞踊部門】（風焔（ふうえん）賞）

加藤おりは y Company DANZAK スペイン舞踊公演「SOPLAR　～いのちの風焔～」

●11月14日（日）　●名古屋市芸術創造センター

スペイン舞踊の伝統的な衣裳や小道具を巧みに用いながら、洋楽器や現代舞踊をうまく取り入れた構成により、新しいスペイン舞踊を創作し、独創的な世界観の表現に成功した。表現活動が抑制され続ける中、加藤おりはのレベルの高い舞踊が、情熱溢れる強い風“風焔”を巻き起こし、観客を魅了した。

【伝統芸能部門】（チャレンジ賞）

登龍亭獅鉄　らくご芝居「新・中村仲蔵」

●11月26日（金）、27日（土）<6回公演>　●G/PIT

落語家としての技量を発揮しつつ、照明や音響、舞台転換といった演出をも一人でこなし、演劇的に楽しめる見応えのある舞台だった。古典落語「中村仲蔵」が、周囲の人物の視点から歌舞伎役者の人物像を浮かび上がらせる形で再構成されており、落語という伝統芸能の世界を拡げようとする意欲に満ちた独創的な作品だった。

#zoom up
ズーム・アップ

大ナゴヤツアーズ代表
加藤 幹泰（かとう みきやす）さん

東海エリアの魅力を再発見する体験型プログラム「大ナゴヤツアーズ」、“名物”より“好物”を掘り起こすリトルプレス「LOVERS’ NAGOYA」など、多様な方法でまちの楽しみ方を発信する加藤幹泰さん。名古屋のカルチャーシーンを語る上で欠かせないキーパーソンとして、様々な年代、フィールドの人々から“みっきー”と呼ばれ親しまれています。これまでの活動を経て加藤さんは今、このまちをどう見ているのでしょうか。　**（聞き手：黒田杏子）**

人と人をつなぐこと

―加藤さんは、どんな子ども時代を過ごしたのでしょうか。

僕は運動も勉強もそつなくこなす、いわゆるクラスのムードメーカーでした。でも逆に言えば突出する特技とか好きなものがなくて、夢中になれるものがある同級生が羨ましかったですね。高校生になって、特にやりたいことがないのに適当に進学先を選んで受験をすることに違和感を感じていた時、友人が「卒業後はハリウッドの特殊メイクの学校に行く」と話すのを聞いてすっかり影響を受けて、僕もアメリカの短大に留学することを決意しました。王道のコースにのらなかったのは人生で初めてのことでしたが、これまでと全く違う環境に身を置きたいと思ったんです。

―やりたいことがないからアメリカに行く、というのは大胆な選択ですね。二年間のアメリカ生活の中でどんなことが見えてきましたか？

アメリカで出会った人は、自国の文化や歴史のことをすごく話せるんですよね。僕は全然話せなくて、かっこ悪いなと。自分が生まれ育った名古屋というまち、日本という国のことをもっと知りたいと思うようになりました。

短大では留学生と現地の学生をつなぐボランティア活動をしていました。留学生の中にはせっかくアメリカに来ているのに出身国の人とばかり集まっている人も多くて、勿体ないと感じたんです。接点さえあれば仲良くなれるはずだと、ハイキングやパーティーを企画したり、安心して話せる場を設けました。そうした経験を経て「人に関わる仕事がしたい」と思い、帰国してリクルートの代理店に就職しました。その後、大阪や名古屋でコミュニティデザインやソーシャルビジネスに関するNPO法人で働くなかで、自分のまち、自分の世代の課題を解決することに携わりたい、と思うようになりました。そんな頃、大ナゴヤ大学の存在を知りました。

アメリカ留学時代

大ナゴヤ大学から大ナゴヤツアーズへ

―大ナゴヤ大学では、学長も務めていらっしゃいましたね。大ナゴヤ大学のスピンオフという形で始められた大ナゴヤツアーズも今年で5年になります。

大ナゴヤ大学は、まちをキャンバスとして一般向けに様々な公開講座を提供するNPO法人で、東京のシブヤ大学の姉妹校として2009年に立ち上がりました。僕はボランティアを経て、2012年に二代目学長に就任しました。大ナゴヤ大学では「まちを面白がる人を増やす」を目標に掲げて活動をしました。名古屋のランドマークである元・名古屋テレビ塔下でのマーケットイベント「SOCIAL TOWER MARKET」や、歴史文化とのユニークな出会いを作った「NAMO.」、“芸どころ名古屋”の祭典「やっとかめ文化祭」などに関わる中で、名古屋の歴史や伝統文化の面白さを知りました。2017年からはこれまでやってきたことを引き継ぎつつ、「体験」での事業化を目指すために、大ナゴヤツアーズを立ち上げました。3年やってようやく形が見えてきたかな、というところでコロナ禍になってしまって。でもその間に、雑誌を発行したり、地場産業とのコラボでものづくりを始めたりと、新しい挑戦もしています。“ツアーズ”という名前ですが、僕はツアー会社をやってるつもりはありません。様々なアプローチでまちを楽しむということに価値をつけたいと思っています。

大ナゴヤ大学「みなとヤレコノ宵祭」体験

伝統芸能に触れて

―これまでの活動の中で、日本舞踊、狂言、都々逸、雅楽、能、茶道などの伝統芸能も多く取り上げられています。元々、伝統芸能にも親しみがあったんでしょうか？

いえ、初めは本当に何も知らなかったんです。だからこそ、そんな僕が行きたいと思えるような企画にしようと。例えば、街なかで狂言を上演するイベントを“辻狂言”と呼んでいるのですが、それを伝統芸能の路上パフォーマンスと解釈して、砂利の上に絨毯ひいて上演したり。大須の神社仏閣で、三味線や落語と現代のバンドを同じステージで楽しむイベントを開催したり。能楽堂で見るのが狂言だと思っている人からすると、びっくりするかもしれないけど、本来そういうものだったんじゃないのかな？ と。

狂言って言葉はわからなくても、あらすじを知ってから見ると舞台上で何が起こるかわかるんですよね。「志村、うしろうしろ！」みたいな(笑)。それを何百年も前からやってるんですよね。人間って昔から同じようなことで笑ってたんだな、と思えたことは僕にとって発見でした。長い歴史の中でいつからか「伝統芸能」という名前がついて、堅いイメージがついてしまっているけれど、現在の自分たちと地続きのものと思えたら親しみを持てますよね。何より世代を越えて、現代の表現としてやっている人がいる。僕には、伝統文化や伝統芸能を「守る」とか「変える」っていう意識は全くない。僕のようにこれまで接点がなかった人とどうしたら繋げられるか、その橋渡しをするのが自分の役割だと思っています。

「やっとかめ文化祭」での辻狂言

お座敷遊び体験（大ナゴヤツアーズ）

両口屋是清の和菓子ツアー
（大ナゴヤツアーズ）

モザイクアートまち歩き
（大ナゴヤツアーズ）

自慢したくなるまち

―名古屋市観光文化交流局が2016年と2018年に実施した「都市ブランド・イメージ調査」では、「最も魅力に欠ける都市」という結果が出るなど、シビックプライドに課題があると思います。名古屋が自慢したくなるまちになるにはどうしたらよいと思いますか？

たとえば「名古屋のおすすめはありますか？」って聞いたら「ない」って答えちゃう人でも、普段よく行く喫茶店や公園を聞かれたらきっと答えられる。僕は「自慢」ってそんなもんだと思ってます。

大ナゴヤツアーズで企画した老舗ホテルの見学ツアーに、娘さんに連れてこられた80歳の男性が参加されたことがありました。最初は全然興味なさそうだったんですが、ホテルの歴史や様々な懐かしいエピソードに触れるうちにどんどん目が輝いていって、ついには「俺はもう大体のことは知っとると思っとったけど、まだまだ世の中知らんことがいっぱいあるなあ！」と言って帰っていかれました。この時は本当に嬉しかったです。たった数時間の体験や、ちょっとしたきっかけで自分の住むまちをもっと楽しむことができる。まちをつくっているのは人だから、そうやってまちを面白がる人が増えればみんなにとって“自慢のまち”になるんじゃないかなと思っています。

わたしの寄附で、土を耕す。　わたしの寄附が、文化になる。

名古屋市観光文化交流局
文化歴史まちづくり部文化振興室
TEL: 052-972-3172

ご寄附のお問い合わせ
名古屋市文化基金 Eメールアドレス
a3172@kankobunkakoryu.city.nagoya.lg.jp

公益財団法人
名古屋市文化振興事業団
TEL: 052-249-9390

詳しくは、市公式ウェブサイト内　名古屋市文化基金　検索

名古屋市

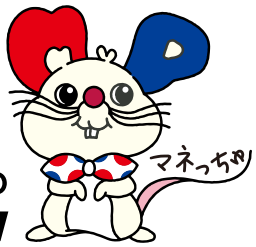
頼もしい味方をお探しですか？

集客・販促プランナー　アートディレクター　印刷コンサルタント

駒田印刷株式会社　TEL(052)331-8881
〒460-0021　名古屋市中区平和2-9-12　http://www.kp-c.co.jp

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命ください。美術展の受付も対応いたします。

業務内容
①舞台の企画・制作マネージメント
②イベントの企画制作
③芸術団体のコンサルティング
④舞台・イベントの運営



MANAGEMENT PRO
株式会社マネージメント・プロ
〒461-0004 名古屋市東区葵2-11-22 アバンテージ葵ビル301
TEL:(052)508-5095　FAX:(052)508-5097　Web:www.mane-pro.com　E-mail:mane-pro@mane-pro.com

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。
ナゴヤ劇場ジャーナル
◎年間6,600円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行
※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、ホール、DM 等にて配布

デザイン・印刷／駒田印刷株式会社

令和4年3月25日発行（年4回6・9・12・3月の25日発行）通巻401号　編集発行／公益財団法人 名古屋市文化振興事業団　〒460-0008 名古屋市中区栄三丁目18番1号　TEL(052)249-9385　FAX(052)249-9386　HP https://www.bunka758.or.jp/